



第53回 日本人工関節学会 ランチョンセミナー15

今こそ知りたい ーフルコンパクション ブローチング手技と術後の骨反応

演 者

安部 聡弥 先生

我汝会えにわ病院

加瀬 雅士 先生

土浦協同病院

今釜 崇 先生

山口大学大学院医学系研究科

三島 初 先生

筑波大学医学医療系

※ 本セミナーはパネルディスカッション形式で行います。

座 長

兼氏 歩 先生 金沢医科大学

開催日時

2023年 **2月18日** (土) **11:45 - 12:45**

場 所

第4会場 (G403+G404)

※ 本学会のランチョンセミナーは整理券制です。(配布場所：パシフィコ横浜ノース1F 総合受付)
配布日時については、学会 WEB サイトをご確認ください。
尚、セッションスタートと同時に予約は無効となりますのでご注意ください。

学会 HP



ランチオンセミナー 15

今こそ知りたい フルコンパクションブローチング手技と 術後の骨反応

近年日本でもその使用率が高まっているFully HAステムの先駆けであるCORAIL®ステムは、7名のフランス人医師とLandos社、そしてHA溶射の高い技術を持つBioland社によって1986年に誕生した。最初の臨床使用から35年を迎えた2021年には累計で300万症例を達成し、英国のインプラント評価機関であるOrthopaedic Data Evaluation Panel(ODEP)では最も長期の15A*の評価が得られている。

CORAIL®がTapered Wedge型やFit&Fill型といった一般的なセメントレスステムと大きく異なるのは、後者のステムがカッティングタイプのブローチを用いて皮質骨の一部と直接接触させることで固定を得るコンセプトであるのに対し、CORAIL®はコンパクションブローチによって海綿骨を圧縮させた“cancellous bone bed”を形成し骨セメントの代わりとして作用させることで、初期固定性の獲得と荷重下での断続的なひずみに伴う応力遮蔽の回避という二つの相対する課題を解決すべくそのデザインが考案されている点である。“silent stem”と称されるCORAIL®は、中長期のX線学的評価においてstressshieldingやcortical hypertrophy、radiolucent lineといった骨変化が殆ど見られず、また大腿部痛などの臨床症状も極めて少ないことが報告されている。

一方、海外レジストリーの解析では大腿骨近位形状とのミスマッチ、不適切な刺入位置やサイズ選択、アライメント不良に伴う不具合に対する警鐘も見られる。CORAIL®を用いて良好な成績を獲得するためには、フルコンパクション手技、ステム長、HA厚、カラー等の特徴を十分に理解して使用する必要がある。本セミナーでは、CORAIL®を中長期に渡り採用している4名の演者が、前方・前側方・後方の異なる進入法でバリエーションのある日本人の骨質・骨形態に対し、実際にどのようなコンパクションブローチング手技を用いてcancellous bone bedを形成しているのかを解説すると共に、術後の骨反応を供覧し知見を共有する。

